

《コーディネーター 森口健司》

それでは、再開したいと思います。皆さん用意をお願いします。久しくコロナ禍で時間を短くしたり、また、人数制限をしたりと大変な中でもフォーラムを継続してきました。鳴門市教育委員会の皆さんに本当に力をいただいています。

皆さん、人権学習の醍醐味は語りにあります。自分の本当のことが言える。それを聞いてくれる。返してくれる。そこに生まれていく絆が子どもたちの、大人たちの、教師一人一人の人生を変えます。

私たちは、様々な現実を生きています。いろんな立場があります。部落に生まれた。部落に生まれなかつた。重い障がいを持った家族のこと。友だちや家族との人間関係のこと。いろんな思いの中で生活している子どもたちと出会ってきました。

でも、幸せは私たち一人一人が決めていくだろうし、そこに豊かな人間関係が拓かれていくれば、私たちの生きる世界が変わっていきます。そんな、深い学びができる、深い絆が生まれていく。そんな語り合いを1時間くらいですけど、皆さんと共有できたらなと思います。

それでは挙手をしていただいたらマイクが回っていきますので、しっかりと語っていただきたいと思います。いかがでしょうか。(フロアーを見渡しながら、手の挙がった男性にお願いします)お願いします。

《フロアー 1996年度板野中学校卒業生 島藤証也》

(嬉しそうに立ち上がり)川内町から来ました島藤です。人権学習をやって変わったのは私です。真面目になって、真面目にやって、自身が変わったことを実感させてもらっています。いろいろ言いたいことがあるけど短くします。

お父さんやお母さんを尊敬していますという、さっきの「T-over人権教育研究所・人権こども塾」の生徒さんの文章を改めて聞かせてもらったんですけど、私もそうです。父親、母親のことを尊敬しています。中学校の時に出会わせてもらった僕の親友ももちろんそうだし、親友のご両親、出会わせてもらって、何度も言うけど尊敬しています。

今日遅刻してしまって、こんな話させてもらって申し訳ないですけど、(ニコニコと溢れる笑顔で)この場に居させてもらっているのが素敵なことなんです。めっちゃありがたくて。中学校時代に出会わせてもらった担任の先生。吉成先生。僕、数学が苦手過ぎて、いまだに算数って言っているんですけど、山口先生。

出会いとつながりに関していろんな考え方、価値観があると思うから、人権に関しての考え方も様々あると思うんです。私の場合は、たまたま行かしてもらった、故郷の中学校でしていただいている人権学習に出会わせてもらって、気がつけば今年43歳になるんですけど、今日改めて思うんですけど、これはあくまでも私の場合ですが、本当にありがたいなって。

部落差別に対する考え方とか、思いとか。人権学習に対する思いとか、それぞれみんな違うと思うんですけど…。(楽しそうに生き生きと)「T-over人権教育研究所・人権こども塾」に参加しとる子どもたちがイキイキしとるんです。私も、保護者として、クルーとして参加させてもらっていますが、行く時には、生き生きと参加させてもらいますし。

この令和の世の中で、この間も地震のこととか、「地震気をつけよ」とか、ごついハラハラしたんですけど、切ない中でも、自分らしく1日1日元気に生きさせてもらおうとか、私の場合は農作業なんやけど、とにかく自分のできることをできる限り実践させてもらおうと思って、お盆も仕事をしていました。今日もここに来させてもらおうと思って、日の出前から仕事して来させてもらいました。来させてもらってよかったですなって思います。

(照れくさそうに)長いですね。言いたいことはいっぱいあるんやけど、イキイキしたこの学びの学習、思

いを語り合えるこの学習が広がったら、少なくとも今よりは徳島や日本の社会というのは、よろこびあふれる社会になる可能性っていうのは、私は絶対広がると思うんです。

そういう部分が農業者としても私の中にもあるからこそ、娘や私の周りの家族が、よろこびあふれる人生がちょっとでも送れるように、自分のできることを実践していきたいなあと思います。(元気よく)すみません。時間オーバーでまとまっています。これからも自問自答(自問自闘)しながら勉強させてもらおうと思います。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

ありがとうございました。いろんな思いが溢れていくこの時間に、様々な立場の方たちの言葉が溢れていいくこの時間にしたいと思います。いかがでしょうか。(前の席からの挙手にはい、どうぞ。

《フロアー 香川県 土庄町立土庄中学校3年》

(一言一言、自分で確かめるように)本当に、私自身いじめを受けたとか、差別を受けたとか、自分の考えを否定されたっていうよりかは、いじめをしたとか、差別をしたとか、考えを否定したみたいな方が、私自身多いですよ。

こう見えて受験生なんですけど、進路を大学とか就職とかで「この仕事はやめた方がいい」みたいなことを言われるんです。でも、私はそれでも行きたいからと思うのに、親は「あなたのことを心配しているから」というふうな、お互いに意見を譲らんみたいでとか、ちょっと、自分は面白半分にクラスメートをいじめたりとか、人権って、今考えたらほんまに、「自分、何しとるん」みたいになって。ちょっと考えたらわかるやんみたいな感じなんですけど。

やっぱり、人権学習をしつづけたから、「過去の自分はあかんやろう」みたいに思えるから、やっぱり、人権学習をして自分を見つめるって、嫌やなあじゃないけど、(言葉を探しながら)…なんか…結構複雑な気持なんですけど。どんな形であれ、人権っていうことに関わっていけて、自分もだけど、人もめっちゃ大切にできるようになって思ったので、これからも関わっていきたいなって思いました。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

すごいなあ。大きな一步です。じゃあ、続いていきましょうか。はい、いこう。

《フロアー 徳島科学技術高校2年》

徳島科学技術高校2年生です。よろしくお願いします。今日はジャージで来てしまいまして。部活終わりで参加させてもらっていますので、変な文字が書いてあるんですが、この格好で参加させてもらっています。

今日、話したいことがいっぱいあって、いつも通り最近自分が思ったこととか、最近オープンキャンパスに行ったりして、地元っていいなあみたいな話をしたらと思っていたんですけど、さっき吉成先生から不登校のお話が出たので、ちょっと自分の話を久しぶりにしておこうかなということで、その話をしようと思います。

(中学時代に思いを馳せながら)自分は元々中学校1年2年生の頃、ほとんど全部不登校で学校に行けてないです。その理由は、最近よく聞くじゃないですか。起立性調節障害って。そういう病気になっちゃって朝が起きれない。朝が起きれないから夜が遅い。夜が遅くなると昼夜逆転して学校へ行く時間がなくて。体力もなくてというサイクルになっちゃうという病気になって、学校へ行けなくなっちゃったんですね。

その中で、「学校へ行けなくてもいろんなことをやろう」というので、例えばゲームをしてしたりとかし

て不登校時代を過ごしていたんですよ。でも、その不登校の時に、不登校の友だちがいたんですけど、その友だちに水族館がテーマになっているアニメを教えてもらって、「ああ、そういうえば最近水族館って行ってないな。ちょっと見てみよう」って思って見て、「ちょっとこれ、水族館って面白いあ。行ってみよう」ということで、最近リニューアルされた「神戸須磨水族館」に行かせてもらって。

それで、そこで見たでかい水槽に憧れて、(持ってきたカバンに付けたたくさんの水族館の缶バッジを見せながら)高校に入ってからいろんな水族館に行くっていう、僕は水族館で外向きになれたんです。水族館を見て憧れて「水族館で働きたい」って最初思ったんです。

(生き生きと)水族館で働くというのは結構難しくて、入り口が狭いんですよ。なので、入試もそうですけど、当時、最初水族館に行ったのが中学校の2年生なので、まあ、受験を目の前にしとる状態で、さあ、受験どうするっていうことになったんです。最低でも「とにかく受験に行かなかったら水族館で働くという夢も叶えれんな。これはまずい」ということで、入試(受験勉強)を始めたっていうのが僕の不登校から入試への現状の話です。

その当時、ちゃんと勉強を始めたのが中学校3年生に入ってからで、身体ももう追いつかなくて、学校も午後からしか行けない、そういう形だったんですけど、とにかく「内申点がないと」ということなんです。

水族館に行くには科学技術高校に海洋科というのがあって、水族館に行くにはそこしかないでしょうということで。でも、その海洋科に行く、進学をするっていうことは内申点とテストの点数が大事。でも、内申点が全然ないから、「どうするの、あなた」っていうのを中学3年の担任の先生から言われて、内申点をちょっとでも増やすために、午後からでも中学校に行こうっていうことで、中学校へ行っていた時に(前の森口さん、吉成さんを指しながら)人権の先生方にお会いして。この「T-over人権教育研究所・人権こども塾」っていうのに行くようになったんです。

そこで出会った友だちがまあすごく勉強のできる子で、その人たちと仲良くなるにつれて、「勉強を教えてくれん?」っていう話になって、勉強を教えてもらったんです。何とかテストの点もギリギリ追いついて、内申点はなかったんですけど、「内申点は直接でカバーしろ」って、吉成先生が言ってくれて、(楽しそうにおしゃべりが得意ですから、それで直接で入学したい思いをしゃべってしまえっていう感じで言われたんです。

わかりますか。僕のこの水族館が好きっていう思いを全力でぶつけて入試に挑んで、何とか受かって、特にさっきも島藤さんが数学が苦手って言われていましたが、僕も数学が苦手で、(照れくさそうに)数学が苦手で、入試の点数開示っていうのがあるんですが、結局数学は入試の時も20点しか取れませんでした。でも、英語と理科はごっつい得意で、社会も好きだったので、全部70点くらい取って、それでギリギリ受かったんです。

やっぱり、「人権こども塾」に参加して良かったことを一つあげるならば、コミュニケーションが取れるようになったんです。昔はコミュニケーション取りににくい人やったんやけど、人権とかに関わって、好きなこととか、将来の夢とか、自分の悩みとか話すようになったら、何でしょうね。交友関係が増えるんです。だから、いろんな人に助けてもらえたし、いろんな人に支えてもらいながら受験勉強ができたから、科学技術高校に受かれたんです。そこがまず一個。

(笑顔の中にも言葉に力が入りながら)高校入学してからも、まあ大変だったんですよ。生き物の世界って、「生まれた頃から生き物触ってきました」みたいな子たちが集まっていたりするので、もう、中学生から触り始めた僕なんかペーぺーですよ。アジとサバの違いがわからないみたいな状態から入って、僕は生き物知識がないんです。

でも、生き物大好きだから「生き物飼育部」みたいな所に入って活動する。でも、みんな僕よりもっと知

識があって、僕は伝えるのは好きだから、好きなことを伝える方法で、何か一個いいのがないかなということで、(足元から一冊のファイルを取り出し、広げながらかざして)この超重いんですけど、レポートというのをつくって、このA4のファイルに生き物の面白さとか良いところを書き連ねたんです。この活動をちょっと個人的に始めたんです。

(ファイルをしまって)この好きなことを伝えたいなという思いを持って活動をしてたら、とある先生に話しかけてもらう機会があったんです。どういう話かっていいたら、うちの海洋科って水泳実習っていうのがあるんです。夏休みにクラスメートみんなで海に行って、すごい遠い距離を海で泳いで帰って来るっていう実習、授業があるんです。

その授業の時に、僕は1回溺れかけて、その時に引き上げて助けてくれた先生が、ちょっと休みながら僕に言ってくれたんです。「藤原君、この海洋科に来てめっちゃ頑張りよるのをよく見るけど、何でそんなに頑張りよるの?」って。

実は豊かな海が好きでこんなことしてっていう、いつもの人権学習で夢を語るのが、超体調悪くて死にそうやのにべらべらと出るみたいな、(会場内に明るい笑いがこぼれる)そのくらい好きでみたいな話をしていたら、その先生がごつい僕を応援してくれるようになって、応援してくれているから僕も調子に乗ってしまって、この見てもらったファイルのことを話しちゃったんです。

そうしたら、その先生から「レポート甲子園、プレゼン甲子園っていうのがあるから、お前語るの好きだから、好きなことを誰かに伝えることって大好きだろう。プレゼン甲子園に1回行ってみないか」っていう話になって、実は今、そのプレゼン甲子園っていうのに向けて、僕がいろんな好きなことについて話すっていう特訓を積んでいるんです。

だから、僕が中学校時代不登校だった時から高校に来るまで、いろんな好きなことがあって、頑張ることがあって、難しいことだらけだったけど、「人権こども塾」に行ったから、溺れかけながらでも好きなことの話ができたり、それってやっぱり、すごく僕にとっては大きな価値だったんですよ。

今日は「人権地域フォーラム」っていうことで、いつもは中学生相手とかに話すんですけど、堅苦しくない話し方になってしまふんですけど、人権学習の強みって、伝えれることやし、伝えられることやし、その練習ができる、その練習の中で成長できる。人ととのコミュニケーションの中でしかできない成長ってあるじゃないですか。それが常にできるっていう良さが人権にはいると、私はこの経験から思っています。(元気よく)という話をしようと思っていました。はい、終わります。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

小学生も中学生も高校生も大学生も、この場もそうです。そこに「共感」と「連帯」、「信頼」と「尊敬」があったら、安心して自分のことを語れるんですね。それを聞くことが誇りになり、そして返していくことができるようになるんです。

皆さん、是非11月3日「人権こども塾人権文化祭」での、多くの中学生の語りに、高校生の語りに出会ってください。今日は城南高校の体験入学と重なって、「人権こども塾」の中心的な子どもたちが来れていません。この後もいろんな年代の方の思いを語っていただければと思います。いかがでしょうか。(前の席の高校生に)じゃあ、いきましょうか。

《フロアー 香川県 小豆島中央高校1年》

(フロアーの方を向き、マイクのスイッチが入っているかを確かめながら)失礼します。小豆島の高校1年生です。僕は小学校の頃、人権のことについて語るというか、学ぶというか、それがすごい大好きで、こう

いう会にも去年あたりから参加させていただいているんですけど。

…すみません、僕はめっちゃ緊張する人なんで、ちょっと待ってくださいね。

(気持ちを整えながら)いつも県内でしか語っていなかったので、今日初めてこういう県外の人権の会に参加させていただいて、違うところに来るのって大事だなとすごい今実感しているんですけど、僕が人権の会に行って絶対話したいことがあって。

見てもらったらわかるように(頭をさすりながら)僕は、こういう頭に毛が生えないという病気を幼稚園の頃から発症していて、それが中学校の途中くらいまでコンプレックスだったりして、そこからいろいろ問題ができていたりするんですけど、幼稚園の頃、みんな幼い状況で、善悪の区別もはっきりつかない状況じゃないですか。幼稚園って。特に男子の友だちからいじめを受けちゃったりして、「男子怖い、女子助けて」っていう状況でした。

この場で男子女子っていう言葉を出すのもどうかと思うんですけど、そうしていると、「女の子とめっちゃおる。お前女なんか」みたいなこともしばし言われるようになって。でも、そんなことが何回も何回もあって。

小豆島って「人権フェスタ」っていうのを年に1回してるんですけど、小学校の頃になってそれに参加して、表現することってこんなに楽しいんだっていうことをまず知って、それからどんどん成長していくって。

(切々と)中学生になって、何だろうな…、うちはちっちゃな島なので、どうしても小学校から中学校に上がるメンバーというのは同じになってしまふんですけど、中学校になると学ぶことも増える。学ぶことが増えるとどんどん視野も広がってくる。その中で、カギになるっていうか重要視されてくるのがこの人権の勉強で、「人権フェスタ」に中学校で参加して、この会と同じようなものなんんですけど、講師の方が来られて話を聞いて、どう感じたかなどをどんどん話をつなげていくんですけど。

(生き生きと)去年、「そういうのが好きだったら県で開かれている人権の会に参加してみようか」ということになって、香川県の人権の会に参加してみたら、「こんなにバンバン自分のことを言うんだな。自分を表現できて、更にそれをつなげていけるんだな」と思ったんです。

先ほど皆さんにおっしゃっていた「アウトプット」「インプット」、そしてそこからのつながりっていうのを、その時すごい実感して、僕も不登校気味な時期もあったので、そこからなんとか高校生になれて、高校生でできた友だちも頭のことを聞かれる人もたくさんいるんですけど、みんな、「その頭どうしたん?癌の治療でも受けてるん?」とか言っていたんですけど、ある人が「めっちゃその方が良くない?」と言って、「はああ?」ってなりますよね。それは。だって15年間生きてきて、ずっと否定から入って来られた話題が、肯定から入る。後押しをしてくれる言葉から入るんです。

(楽しそうに)そこで、初めて僕が思っていたのと違う回答が来てびっくりしたと同時に、…(言葉を探しながら)何と言いますか、言葉があいまいなんですけど、嬉しかったといいますか。そういうこともあって、やっぱり広い世界を知るって大事だなと感じて、今日この場に来させていただきました。中学校の方々と一緒に。

前に来られているパネリストの方々とか、森口先生の言葉。そして、スクリーンで見た動画とか、人それぞれ感じ方は違うけど、どこかでつながっている部分があるんだなっていうふうに思いました。なので、うまく表現はできないんですが、…人権学習のこの輪がもっともっと広がっていけたら、今時の子だったらゲームだったりとか、趣味だったりとか。しかもネット上でつながることが多いんですけど、人権って、ネットだけじゃなくてこういう場所に来て、みんなで本心で語り合って、そこからのつながりって何か特別なものを感じるんです。

なので、そういうつながりがもっともっと広がっていったら、日本全国の人権の問題とかも解消されていくって、いろんな人が仲良く、差別とかもない世界が築けるんじゃないかなと思いました。以上です。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

(いっぱいの笑顔で)すごいですね。つながってどうでしょうか。ではいきましょう。

《フロア 島根県松江市 植田延裕》

(前に移動し、フロアに向かってニコニコと)失礼します。森口先生から圧力をかけられながら、松江から来た植田延裕といいます。よろしくお願いします。森口先生との出会いは、2002年に浜田市立第三中学校という所に居ました時に、人権・同和教育の担当をしておりまして、森口先生に来ていただいたところがきっかけです。今も可愛がっていただいて、今回もこの会のご案内を 통하여まいりました。

私は、島根県で中学校の教員を17年しまして、その後転職しまして、今は松江市の路線バスの運転手を10年くらいしているんです。そんな経歴です。話したいことは溢れているんですが、今日、森口先生の一番初めのところにあった「幸せな43年間でした」という言葉が残っていて、生きる意味というのを初めて提示されたと思うんですが…。

自分も教員生活をしていた17年というのは、24時間ずっと子どものために、今はそれはブラックと言われていますが、(会場に笑いがこぼれる)ひたすら寝ても覚めても教育をっていう生活をしていました。

私は母と2人で生活していたんですが、母が全ての家のことをやってくれていて、自分のほぼ全ての時間を教員生活に捧げることができたが故に、こういう人生を送っていました。

(だんだん力が入りながら)転職の転機になったのは、これは多分今日の重要なさわりになると思うんですけど、学校現場というのはすごく忙しくて、一番足りないのは教員同士のつながりだと僕は思っています。僕が務めた最後の4校目の学校は、…ちょっと大変な荒れた学校で、先生方もお疲れになられて途中でお休みになられる。みんな辞めたいと言う。新しく来た教員が、いろんな仕事がいっぱい来るんですね。2年3年目の先生が音を上げてしまって、新しく来た先生にいっぱい仕事が振られるんです。1ヶ月もするとみんな出たいと言って、3年で変わっていくんです。

僕もその頃、母親がパーキンソン病で週に1回病院に連れて行かなければならず、お休みをもらったりしていて、離婚して別れてはいたんですが、広島の父が癌で余命いくばくで、月に1、2回は広島に行く。そんな状況にいたんです。という状況であるにもかかわらず、担任を持って、部活を2つ持って、授業もビッシリで、そんな生活でさすがに心の病になってしまって。

もう1つやりたいと思っていたのが、バスの運転手だったので、それはもう転職をしろということかなと思って、新たな人生を歩みました。やっぱり今、教員のそういうつながりっていうのがなくなると、人権教育って薄っぺらくなるんじゃないかなと思います。

森口先生の実践記録から「チーム担任制」や、森口先生を核にしていろんな先生とのつながりをつくっていて、子どものためにこんな関わりをやろうという熱が、今の学校現場ではあまりの忙しさから持ちにくいくかもしれません。たまたま僕がいた学校がそうだったのかもしれません、今、教員でない立場から、学校現場の最近のいろいろなニュースを見るにつけ、聞くにつけそんなことを感じました。

(当時に思いを馳せながら)僕は、理科の教員をして、その時間が人気でしてテストの点も良かったんですけど。僕は右手に「障がい」があってですね、2歳の時に牛のえさを切る機械に手を入れてしまって、それから「障がい」があったんですけど、小学校の3年生の時に「ちょうど結び」っていうのがあって。親

や誰も、「あなたはできないからしてあげる」と言ってしてくれていたんです。でも、その時の担任の先生は「できるよ」って言われて、一緒に練習してできるようになって、できるよろこびっていうのをすごく実感したんです。そういう教師になりたいなと思ってなったものですから、理科の時間に見ている人がいないようにしようとか、みんなで関わりもって実験しようとか、そんなところを力を入れてやって、授業の中で子どもたちのそういう関わりを大事にしたところから、学ぶよろこびとかを感じて子どもたちが理科を大事に思ってくれたのかなと思っています。

今日の話にも出ていたけど、やっぱり子ども同士の関わりが大事だし、こういう大人同士のチームワークでの関わりが大事で、これを置いては上手くいかないんじゃないのかなと思っています。以上です。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

ありがとうございます。できるだけ多くの人の思いがここに溢れたらと思います。いかがでしょうか。はい、じゃあいきましょう。

《フロアー 香川県坂出市 宮内宏和》

私は香川県の善通寺東中学校で教員をしています。森口先生は43年目だと言われましたが、私は教員生活今年45年目の夏休みを迎えるました。定年退職をして、再任用も終えて、今は野球で言うと延長11回に入っています。(会場に明るい笑いが起こる)

今年どうしてここに来たかというと、去年は5打数3安打。森口先生絡みのこういう研修会に3回来たんですね。とても素晴らしいたくさん学びました。こういう中学生、高校生、小豆島の子どもたちも持っている新しいムーブメントに出会って、今年はフル出場を目指して、多分全打席に入って、フル出場を目標で来ております。

(昨年のフォーラムに思いを馳せながら、楽しくてたまらないというように)今、ムーブメントと言いましたが、1つは、伸二さん、一昨年中学生の会でお嬢さんを連れてきました。去年はこの僕の後ろの席に5年生と2年生だったかな、2人のお嬢さんが居ったんです。

そして、ステージの上に上がっておいでのことで、お父さんの話をどんな人たちがどんな顔で、どんな状況で見ているかということを見て欲しいということで、語ってくれました。その後、席に戻ってきた時に、お嬢さんたちにグーの手を伸ばしたらお嬢さんたちがグータッチを返してくれました。

今年は何があるのかなということが楽しみで楽しみでね。今年はご両親が来ているということで、これがまた、ムーブメントということで。また、徳島市ではPTAを巻き込んだ人権学習があるということは、非常にすごいなと思っております。

それから、チェリーさん、こんなことを申し上げると大変失礼なんんですけど、「なごり雪」っていう歌があるじゃないですか。「今、春が来て」というか、「夏が来て、去年よりきれいになられたなあ」と思います。

(会場に明るい笑いが響く)チェリーさんを見ましたけど、葛藤をしながらの6人のお母さんって見えないです。

そんなこともありながら、香川県でもムーブメントができていますけど、徳島でもムーブメント、伸二さん、簡単ではないですね。お話の中でわかりました。チェリーさんも去年はもっと勢いで話していたように思いましたが、今日お話を聞いてしんどいことも伝わってきました。

スッとまっすぐ行くのではなくて、渦潮のようにスパイラルしながら新しいムーブメントができていることを手ごたえをつかんで帰ります。ありがとうございます。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

はい、じゃあいきましょう。後ろの方お願いします。ゆっくりしゃべってください。

《フロアー 中野伸二・父》

(コーディネーターの言葉に応えるようにうなずきながら、明るい笑顔で)目と目があつたら当たられる気がしていました。ちょっと書いてきました。思い出話になるんですけど、聞いてください。

うちの子は、昨日の夜遅く帰ってきました。時間をいただいてすみません。

一昔前になるんですが、あの当時、先生に教えていただいた子どもたち、優しくて思いやりのある子に育ってくれました。あの当時、先生が私の家に来ていただきました。吉成先生は、新婚だというのに私の家に奥さんと来ていただき、いろいろと話ををしていただきました。

私たちの子どもは、その当時運動部に入っていました。吉成先生とその時、雨だったので1つの傘の中で話をしました。子どもは夜遅くまでダンスをして帰って来るので、その当時のダンスでしたので、「ダンスをしてもいいですか？先生」と聞きましたところ、吉成先生は「大いにやらせてください」と言われました。今では、ダンスがオリンピックの種目になっています。先生のおっしゃられたことが、今でも私の心の中に残っています。

また、森口先生にも、私たちの狭い家に来ていただきました。家の中に、大会でいただいた賞状が掛けたり、決して私は自慢のつもりで掛けたわけではありません。子どもに自分がした証としてよろこびの気持ちを持ってもらいたかったんです。自分自身に自信を持ってもらいたかったんです。

いつも子どもたちのことを一番に考えてくださる先生方。その当時の子どもたちは、私にとって宝物です。今でも声をかけてくれます。

(精いっぱいの思いを込めて力強く)私の家に遊びに来てくれたその当時の子どもの1人が、「おっちゃん、この団地は僕のルーツなんじゃ。僕の誇りなんじゃ」と言ってくれました。その子どもは、今もこの団地に住んでおります。

私たちにとっては、世界一の自慢の息子です。家族が一番の宝物です。難しいことはわかりません。ただ、(力を込めて)差別のない社会、差別のない心になることを陰ながら嫁と一緒に応援をしております。ありがとうございます。

私には学歴もありませんが、今、息子のおかげで、食肉センターに勤めていたことを、今胸を張って言えます。ありがとうございます。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

改めて紹介させていただきます。中野伸二さんのお父さんです。実は「人権を語り合う中学生交流集会」が7月21日にあったんですけど、その時もおいでていました。

当日、伸二さんに写真を撮ってもらっていたんですけど、その会においでるきっかけは、その中学生集会のチラシを友だちの託也さんが伸二さんの家に届けた。伸二さんは「人権を語り合う中学生交流集会」にお父さんお母さんが来ていることは知らない。「父ちゃん母ちゃんが来とるよ」と言われ、お昼に食事に親子で外に出て、(楽しそうに)車の中で、森口先生と目があつたらこれを発表しようと思って原稿を書いたと、昼食後、車の中で伸二さんに読んで聞かせたそうです。

「人権を語り合う中学生交流集会」の時には中学生がバンバン発表するから、お父さんに発言していただく時間がなかったけど。(よろこびを込めてしみじみと)伸二さん、やっぱりね、親はありがたい。

私自身、何で43年教師をしてきたか。私の身体の中に、じいちゃん、ばあちゃんがずっと居るんです。親

父が居るんです。母親が居るんです。

この命をいただいて、その命のバトンをつないで、自分の仕事をずっとやらせてもらっていました。その家族の存在が、ずっと力になってきました。そういう思いを共有できる関係でありたい。安心して自分のことを誇りとよろこびを持って語っていける。そんな人権学習が積み上げていけたら、こんな嬉しいことはないと思います。人権学習の醍醐味は語りにある。その一番は身近な仲間への語りです。そして何より家族への語りです。

それが安心して語れる関係になった時に、本当にこの学習は全ての子どもたちにとって、よろこびとなり生きる力をしっかりと育んでいきます。すごい空間になっていますよ。ではいきましょうか。(フロアーを見まわし、挙手のない中で)じゃあ、伸二さん、一言しゃべりますか。(会場全体で明るい笑いがこぼれる)

《パネリスト 中野伸二》

(戸惑ったように立ち上がり、思わず本音がこぼれ会場の笑いを誘う)帰りたい。いやいや、本当にありがたい話やなと思います。(思いがあふれ泣きそうになる自分を抑えながら)本当に子どもやなと思います。こういう伝え方をされたら、まんま自分の子どもにも伝えていけたらなあと、今、ほんまに思いました。大事なことやけど、関わり続けることで、悩んだ時に一緒に話し合える関係というのを築いて、地道にやっていこうと思いました。

さっき話をした時に、(家族で)話ができないという話もしたんですけど、家族で「破戒」の映画を一緒に観ました。

その後で、プライムビデオかな、韓国ドラマをよく妻が見ているんで。その時に呼ばれて、「この前観た『破壊』の映画あるよ」って言われて、それだけで満足しました。「ああ、覚えとったんや」という。

まあ、小さいことですけど、そのようなつながり方をしながら、親を見つめながら、いろんな人を見ながら成長していきたいと思います。もう、へたくそな親父の文章を聞いてくださってありがとうございました。(溢れるような笑顔に会場から明るい笑いが起こる)(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

(ニコニコと)これは嬉しいな。では、続いてどうぞ。

《フロア 香川県土庄町 藤原一章》

小豆島から来ました藤原と申します。(照れくさそうに)この中でなかなかしゃべりにくいなと思って手を上げなかつたんですけど、小豆島も毎年たくさん来て、こうやって同じ教員や生徒たちとこの場を訪れて、いろいろ共感したり話ができるのを楽しみにしています。

小豆島は自然是美しいし人も温かいし、とってもいいところなんんですけど、ちょっと世間が狭いので、それがいろんなところで足かせになって、部落差別とか、障がいとか、外国のルーツのある人とか、そういうのをなかなかうまく受け入れられないという現状があります。

そういう中で、本当に僕たちも、どうやったらこれを変えられるんかなと思って、20数年前に森口先生とかに相談をして、その時に伸二さんは都合が悪くて来れなかつたんですけど、託也さんとか来て、森口先生はこんな取り組みをしているよというのを語っていただきました。

その中で初めて小豆島の子が「実は今話をしている地区出身が私なんです」と、いきなり手を上げて語りました。それが小豆島の人権学習が突然大きく進んだ一歩でした。

そういう取り組みを一つ一つ重ねていって、今は町の中でそういう語りをするっていう時間をつくってい

ます。といつても、なかなか差別をする側が悪いとか、差別する側の問題だということはわかっているんですけど、それをどうやって自分たちに落とし込んでいくか。子どもたちがそれを一生懸命考えて語るんですけど、なかなかそれが町の中に、大人の中に伝わっていかなくて、それをみんなで、日々進めているところです。

と言いながら、私も突然義理の妹を病気で亡くしたりとか、人の命っていうのはやっぱりこういうものなんだという、命を失うっていうのは、こんなに大きな問題なんだということを痛感致しましたし、逆に娘と一緒にこの場に来て、話をさせていただいたんですけど、その娘に子ができて僕の孫ができたりして、命が亡くなったり、命が改めて生まれるっていう、その出会いや別れっていうのを随分痛感したなっていうことも人権学習を通して語っていきたいなと思っています。

でもとりあえずいろんな人と会えて、語れて、つながれるって大事かなと思います。あと、継続って大事かなと、今年また、痛感させていただきました。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

ありがとうございます。この大勢の前で語るっていうのはやっぱりエネルギーが要ります。でも、そのエネルギーがすごい力になります。自分の本当のことが言えるよろこび。それは聞いてくれるから言えることです。

一人一人の思い、誠実につないでいきましょう。

《フロアー 小豆島出身の高校生》

私は小豆島出身で、今は奈良の方の高校に4月から通っているんですけど、小豆島は本当に何もなくて、こんなところ出て行ってやるっていう思いで(会場に明るい笑い)、出て行って、実際それで出て行ったんですけど。小豆島でやっている町の集会で、3年前か2年前くらい前に初めて「島差別」っていう言葉を聞いて、そんなのあるわけないやんと思って出てきたんですけど…。

実際出て行ったら、ほんまに「島って何なん?」みたいな感じの質問ばっかりで、何をするにも、一緒にご飯を食べようと言っても、「箸忘れたから誰か貸して」みたいな(思いがあふれ流れる涙で言葉にならない中を必死で言葉をつなぎ)、「箸持っているから貸してあげる」って言ったら…。(近くの中学生たちからくちぐちにかかる励ましの声に支えられながら)

「いや、島だからいいわ」、いじりは我慢できるんですけど、「島だから無理」みたいのがほんまに無理で、自分のあだ名がみんなから「島」って呼ばれていたりして。(何度も涙があふれ言葉にならず、それでもやめることなく必死に言葉を紡ぎ出そうとする)

どうでもいいわって最近思って、8月に入って帰ってきたんですけど、やっぱりどんだけ嫌で出て行っても、やっぱり地元がいいなあと思って。どれだけきついことがあっても、やっぱり相談するのは地元の友だちやし、家族にも相談できるし、もともと地元が嫌やったりしても、結局帰って来るのは地元なので、地元の友だちとか地元を大切にしてほしいなと思いました。(会場から励ましを込めた大きな拍手が起こる)

《コーディネーター 森口健司》

(発言者に思いを込めて)一番大切なものが否定されていく、その悔しさ。切なさ。でもね、その思いを聴いてくれる仲間の存在は宝物です。おかしいことはおかしいときちんと正していくし、伝えていくし、間違っていることは間違っていると言える。そんな絆を大切にしていきたいと思うんです。

私自身、故郷を離れて過ごした京都の地で部落出身を隠し通してきた大学の4年間があったんですけど、

その中に心を許せる、「こいつにだけは…」っていう仲間ができる、その仲間に支えられ励まされ、自分がある。その関係がずっと広がる。そんな人ととのつながりをつくっていく力を持つために、この語り合いがあると思うんです。

自分の思いを伝えていける仲間をつくる力を培い、心が通う素敵なか仲間をつくる高校生活にしていくために今日来ているんです。そんな生き方をつかむために今日出会ったんです。(全体に向かって)皆さん、どう聞いたですか。どう返しますか。いろんな思いが広がっていったら嬉しいなと思います。(後ろの席に手を伸ばしながら)思い伝えてください。

《フロアー 元板野中学校教員 山口智恵子》

失礼します。大事な時間を文章がいつも脈絡が変になる山口なんですが、皆さんの意見を聞きながら、自分が人権学習に向かっていた頃の教員生活の時のことをいろいろ思い出しました。(あふれてくる涙をハンカチで押さえながら)

森口先生も吉成先生もすごく説得力があるんですよね。授業をしてても生徒たちが目を輝かせてくらいいついていくっていうか、そういう中で一緒に教員をしながら、(何度も、思いがあふれハンカチで目を抑えながら言葉をつないでいく)自分が本当に非力だということを思い出します。なかなか思っていることが伝わらずに、今も伸二のように涙が出るんですけど、よく森口先生に「その涙は何ですか?」と聞かれました。

ダメな自分を乗り越えようとする時に、どうしても頑張らねばということで涙が出ます。多分、伸二もきっとセットアップ、もっと力をつけようと思っているから涙が出るんじゃないかなって思います。

だから、「前に立つ人間は涙を流していいやあいけない」という人もいましたが、自分も頑張っているっていう姿を見せるためにするんじゃないんですけど、自分も頑張らないといけないということで、教員生活は本当に涙涙の人権学習でした。

でも、そこでいろんな人と会って、大切な言葉をいっぱいいただいてきました。教員を続ける力、そして、もう教員をやめて普通の生活というか、退職してプラプラしている時も、ふと思い出すのは人権学習とか人権集会とか、そういう時に会った人の言葉です。

やっぱり伸二が「先生、輝いていますか?」って言って、違う学校に行って、しばらくして伸二に会った時に、「先生、頑張っていますか?」って言われた時に、「ああ、そうだ。自分は板野中学校を離れてあの時の情熱が覚めていないか」と振り返るきっかけにもなりました。

それから人権集会で会った高校生の男の子が語った言葉。それも時々思い出します。「なあ、みんな」って呼びかけて「人を好きになるって、その人の何を見て好きになる?何を感じて好きになる?」その言葉はとても考えさせられる言葉でした。この人良い人やな。いい感じの人やなって思う時に、その人の何をもってそう感じるのか、私もよく思います。

今日、伸二さんの言ってくれた、「ここに集まってくれている人たちは、何かを思っているからここに集まってくれたんでしょう」っていう言葉、本当にそうだと思いました。ここに集まってくれている人たちは、人権に対する思いが何かあるからだと思います。私のつたない言葉でいつも支離滅裂になってしまいますが、自分も頑張っていかなくちゃって思うので、大切な時間をいただきました。意見をくださった皆さん、パネラーの皆さん、ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

ありがとうございました。全体学習で会ってきた子どもたちが、いつも言います。涙を流しながら本気で語ってくれた先生がいたから、自分も本気で語った。それが今の自分をつくっています。

板野中学校の全体学習は、「共感」と「連帯」です。「信頼」と「尊敬」です。その関係はずつとあります。(力を込めて)それが人権学習なんです。本気の言葉。本気で自分のことを語る。そういう学校、そういう職場、そういう地域社会にしていく。それがこの学習のよろこびです。あとお一人かお二人、いかがでしょうか。(手を伸ばしながら)はい、じゃあ一番後ろの方。

《フロアー 小学校教員》

小学校の教員です。2年前2年生の担任でした。イベントか何かあって、子どもたちが何か大変そうなことをしていて、31人のクラスで全員に、「それ大変じゃない。しんどない?」って聞いたら、「大丈夫。僕たちはしんどいの慣れているから」と言いました。もう、2年生の段階で学校ってしんどいっていうところを我慢するみたいなことを言っていて、ちょっと自分が変わらなければならないなと思いました。

本当に、さっきも森口先生が言われたように、安心して喋れる場とか、相手を信頼するっていうのは、普段のコミュニケーションがないと絶対にできないと思うんです。特にすごくコミュニケーションが苦手な子どもたちなので、その中で1人だけ大人がいて、自分にできることって何だろうと考えました。

朝きたら子どもたちが宿題を机の上に積み上げるように出します。子どもたちにのんびり「昨日何しよう?」みたいなことを話すっていう時間は正直言ってほとんどないです。だけど、これは宿題の丸付けよりも子どもたちとたわいない話をして、少しでも異変があったり、それが特になくても、人とコミュニケーションができる、これが普通なんだなという、当たり前みたいな感覚を持ってほしいなと思って、何が大事かという優先順位みたいなことをつけて今はやっています。

だけど、学校の中で、こういう皆さんと共有する場が足りないので、今、頑張っているところです。本当に子どもたちが安心して大人になるっていうのが、小学校の先生としての自分の使命だと思っています。年間20000人自殺しています。小学校・中学校・高校生500人死んでいます。自殺と認定されているだけの数です。なので、そんな社会を少しでも良くしたいと思って、私のできることは、たわいもない話を小学校の子どもたちと一緒にできればなあと思いながら、また、それができて、子どもたちと人権について語れる場ができればいいなあと思ってしています。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター 森口》

ありがとうございます。それでは、今挙手いただいている方で終わります。よろしくお願ひします。

《フロアー 柳本 歩・夫》

パネラーさんの中にいるチェリーの旦那です。(照れくさそうな笑顔で)まず、僕が素人ながらも考えさせてもらったこと。パネリストにはなれないけど、いろいろ考えることはあります。

若い子に言っておきたいことがあって、いろんなことに対して抵抗してくれている子どもたちだったり、考へくれている子たちがここに来てくれているとは思っています。さっき、奈良の高校に行って辛い思いをしたっていう方もいるんですけど、どうしてもの時は逃げてください。その町から、その県から逃げてください。逃げることも大事だと思います。

先ほど自殺の話もあったんですけど、生きてるだけでいいことは何年後かにはあると思います。僕は今年で43歳なんんですけど、辛いことも経験したし楽しいことも経験しました。良いことも悪いこともあります。悪いこともしてきたし良いこともしてきたと思っています。

僕は海外に仕事でよく行くんです。いろんな、中国だったり、台湾だったり、タイだったり、今度インドネシアに行こうかなとか思ったりもしています。日本が嫌だったら海外に逃げてください。逃げる場所はい

っぽいあります。大人の方に言いたいことは、いる場所をつくってあげてほしいなって思っています。

しんどくなったら、今はネットだったり、友だちだったり、趣味だったり、逃げる場所がたくさん出てくるんです。その中で必ず共感してくれる人が出てくるのかなと思ってますので、それを忘れずに生きてください。明石家さんまの言葉で「生きてるだけで丸もうけ」っていう言葉があるんです。僕の大好きな言葉なんですが、生きていれば必ず良いこともありますので。これだけです。以上です。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

皆さん、ここで出会えたことは大きいですよ。ここで本当の溢れた思いを受け止められたことは大きいですよ。ここに集まったことがよろこびです。そういう営みを積み上げていきたいと思います。

時間がないんですけど、最後、チエリーさんから、伸二さん、吉成さんと締めの言葉を語っていただいて終わりたいと思います。じゃあ、いきましょう。時間ないので短くね。(パネリストから笑いがこぼれる)

《パネリスト 柳本 歩》

ありがとうございました。いろんな人の話を聞くっていうのは、どんどん機会が減っていく場面で、わざわざ時間をつくらないとこういうみんなの話が聞けないんだなということをつくづく思いました。

今日は前に立って話をさせてもらいましたが、今度はいつか皆さんこの場所に立ってもらって、声を聞く側でしっかりと聞いてこの勉強を続けていけたらと思いました。ありがとうございました。(拍手)

《パネリスト 中野伸二》

今日は皆さんありがとうございました。この場から見させていただいて、小さいお子さんいらっしゃるのに我慢していただいて、話を聞いてくださっていました。ありがとうございました。

教育長も、僕の知っている限り、こういう会で教育長って挨拶して帰られるって定番だと思っているんですけど、ずっとお付き合いいただいて、すごい市やなと思いました。自分の住んでいるところにもこういう市があって、頑張っているという伝え方をどんどんしていけたらなと思いました。皆さん、ありがとうございました。(拍手)

《パネリスト 吉成正士》

会が始まる前に、この新しい建物で話をしていて、その時に「町づくりが人づくりにつながるようなコンセプト」。そんな話を伺って、素敵なコンセプトだなあと思いました。かつてね、「部落に生まれて来なかつたらよかったのに」という思いを持って、生まれ育った故郷を出たという話をよく耳にしました。ところが皆さんさっき聞いていただいたように、「もし両親が結婚していなかつたら自分は存在していなかつた。お父さんとお母さんが結婚してくれてよかった」というのを聞いてもらったと思うんですけど、そう思えるような教育っていうか、人づくりってそういうものなんだなと思うんです。教育が人をつくり、その人が町をつくるっていうことなんだなあと思うんです。その一番根っこになる教育、子育て、人づくりっていうのを大事にしているんだなあと思いながら、この新しい建物にいます。これからもどうぞよろしくお願ひできたらと思います。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

最後になるんですが、前をご覧ください。2004年9月9日の人権地域フォーラム。21年前になるんですけど、この時からずっと記録づくりを担当していただいている、鳥取の佐伯孝代さんという方です。

毎年、一番前に座って一番に発言される方です。今年は、地元の倉吉市で開催される人権集会が重なったことで参加できませんでした。それで、参加している人権こども塾の子どもたちへ、こういう葉を送っていました。この葉に記されている言葉を紹介します。

会いたいあなたがいるから
語りたいあなたがいるから、
今日も頑張っているあなたがいるから、
今日も前を向き
一步一步歩き続けられる
私でいられます。
大切なあなたへありがとう

人権学習は「共感」と「連帯」です。「信頼」と「尊敬」です。互いへの「感謝」です。そんな関係性が本気の語りを生んでいきます。本気の言葉が心に沁みていきます。それが生きる糧になります。そんな思いがあふれたフォーラムになりました。

語っていただいた皆さん。一生懸命聞いていただいた皆さん。互いへの感謝を込めて、最後に拍手をして終わりたいと思います。皆さん拍手をしてください。ありがとうございました。(会場に大きな拍手)

《司会者》

森口さん、パネリストの皆さん、ありがとうございました。閉会にあたりまして、鳴門市人権教育推進協議会会長 島田茂仁よりご挨拶申し上げます。

《鳴門市人権教育推進協議会 会長 島田茂仁》

閉会にあたりまして一言お礼を申し上げます。コーディネーターの森口先生をはじめ、3名のパネリストの方々。大変お疲れさまでした。ありがとうございました。また、フロアーからたくさんのご意見をいただいたこと、感謝申し上げます。

今、前の画面に名前が出ておりますけれども、私の家にも、佐伯さんから昨年の写真と一緒に手紙をいたしましたので、それを紹介することによって、お礼の言葉に代えさせていただきます。今回来られておりませんので、ご本人の了解はいただいておりませんが、許してくれると思います。

「2023年の鳴門市人権地域フォーラムが、鳴門市のなるちゃんホールを会場に4年ぶりの県外参加可能の形で開催されました。遠くは埼玉から、東京から、香川から、鳥取から、そして地元と、110名を超える参加のもと、パネリストの語りを受け、フロアーからも様々な立場からの発言が途切れることなく続きました。やっぱりこのフォーラムはすごいと、今回も実感しました。自分を語りたいと思えるフロアーの空気を他の研修会では考えられない気がします。皆さんとこの場を共有できたことはこの上ないよろこびです。」

森口先生の語りの中でも、「語り」という言葉が何度も繰り返して語られたかと思いますけど、語るということで人権教育も広がりを見せていくたいと思います。最後に、佐伯さんご自身が書いてくださっているんですけど、ご本人のこと。「同和教育幸せ配達人」ということで、「同和教育」ということであえて使われたのだと思いますけれども、配達をし続けてくれているようでございます。今日はおいでていませんけれ

ど、佐伯さんの手紙の紹介をしてお礼に代えたいと思います。本日はありがとうございました。

《司会者》

以上で、2024年度鳴門市人権地域フォーラムを終了いたします。皆様、どうもありがとうございました。